

# 露団々

—— 映画文学人生論

原作：幸田露伴（1889）「都の花」

第一回：古池や蛙とび込む水の音

第二回：長き日を囀り足らぬ雲雀かな

第三回：疑ふな潮の花も浦のはる

第四回：海暮れて鴨の声ほのかに白し

第二十一回：あら尊青葉若葉の日の光り

卷中章頭の俳句は、皆諸国に散在せる芭蕉  
碑上のものなり

幸田露伴の出世作『露団々』は二十一章からなる小説で、各章のタイトルが芭蕉の俳句、しかも露伴が旅の途中で見かけた芭蕉の碑の俳句ばかりという風変わりな趣向となっている。

第一回は「古池や蛙とび込む水の音 此心知り難し」。にうよるく（ニューヨーク）のぶんせいむという大富豪が一人娘の花婿を募集するという新聞広告を出す。持参金は一億九千万円。花婿の条件は、教育職業、性質、容貌、財産、家族、宗教、人種などは問わず、ユダヤ人でも支那人でもよい。ただし、年齢は二十歳以上三十五歳までで、「決して不愉快の感覚を抱かずして、常に愉快なる生活をなし得る者なることを要す」。

一億九千万円といえは現在でも大金だが、露伴が『露団々』で五十円原稿料を貰って喜んだ明治二十二年ではとてつもない天文学的な金額である。この新聞広告は大評判になり、応募者多数がぶんせいむ邸に押し寄せた。

その頃、アメリカにはぶんせいむのような大富豪がいたというわけだ。どのようにしてそんな資産家になれたのかというと、捕鯨である。

彼は破損した捕鯨船を香港で買取って修理し、べえりんぐ海峡で非常な好結果を得て、四年間で七艘の捕鯨船を所有するようになったが、思うところあって、四十五万ドルで売却したという。



## 露団々 ——— 映画文学人生論

けしからんと、現在なら反捕鯨団体から抗議されそうな話だが、当時のアメリカには反捕鯨運動はない。それどころか、ペリーの黒船で日本の開国を促した背景にはアメリカの捕鯨産業の要請があった。ハーマン・メルヴィルの『白鯨』（田中西二郎訳）によれば、「もしあの二重に閉鎖された国、日本が外人を迎えることがありとすれば、その功績を負わしめられるべきものもまた、捕鯨船のほかにはない」。

露伴はその辺の事情がわかっていたのだろう。『露団々』が世に出たのは明治二十二年、その二年後には捕鯨を題材にした小説『いさなとり』を発表している。

露伴という筆名は、陸奥ひとり旅の途中、夜更けに疲れたる時に思いついた名前だという。小説『露団々』の題名と構成もその旅枕と関連しているにちがいない。

持参金一億九千万円の花嫁の相手に選ばれた若者が誰かはどうでもよいとして、一時は有力候補と目されたのが支那人の身代わりとして応募させられた吟蝸子という日本人。西洋人には蟬の声は雑音に聞こえるというから、蝸（ヒグラシ）を吟じる男子では常に愉快的生活をなし得る者とみなされるとはとても思えないが、なぜか大富豪ふんせいむ氏のお気に入りになったという。

里遠しいざ露に寝ん草まくら

露伴